

泥棒とイーダ

第30回 Just for Fun

牧田真有子

腕を伸ばしすぎて崩した体のバランスはどうか持ち直したが、もがいた拍子に、ブレザーの袖口が水面をかすめた。あと少しだ。池の中から突き出す岩に片手片足を掛け、空いている手を思いきり伸ばして、水中でゆらゆらと歪曲していた袋を引き上げる。低くした頭から髪一本がひっそりと落ち、緑色の池の面に載った。その下を黒い魚が泳ぎぬけていく。岩肌を押して体勢を戻す。

心臓はまだこわばった速度で音を立てていた。十一月の池に落ちたら始末に負えない。学校で制服から着替えるものなんて体操着しかないし、その体操着こそ今の今まで寡黙に水底へ沈んでいたのだから。

あれ以来史乃からのあけすけな攻撃は続いていて、今日は体育の授業の直前に体操着が忽然と行方をくらましたのだった。放課後は本来なら文化祭のための環境問題パネル作りに参加すべきなのだが、私は自分の持ち物を捜して校内を徘徊していることが多い。盗られたものが金銭のときだけは、捜しても無駄なので、環境問題について調べものをする人たちの末席に連なる。

裏庭は大勢が口をつぐんでいるようなみっしりした静けさに満ちていた。水を存分に含んだジャージとTシャツを取り出して両手で絞り、池の縁に並べていく。

「亜季ー、土曜って空いてるー?」

いきなり声が降ってきた。見上げると三階へいたる階段の踊り場から沼男がふさふさ頭を突き出している。

「うん」

私は言って、ビニール袋を逆さまに持った。びしゃびしゃと水を吸っ

て地面が変色した。

「エコイベントの取材、俺と亜季の二人が任命されたんだけどさー」

沼男は大きな柔らかい声で言った。妖しい羊歯が風に揺れていた。

「パネル用？ 了解」

「よかったー。デジカメは俺持つてくから。十一時に駅集合なー」

私はうなずいた。辺りはもう薄暗い。水で濡らしたあやふやな手形が岩肌についていた。

たかく張りめぐらされた、カーキ色や黄土色といったアースカラーの三角フラッグが、風にぱたぱた翻る。石畳の広場にはブースごとの白テントがひしめいていた。河川を汚染しない洗剤を売る店の隣では、女性たちがオーガニック化粧品を試している。間伐材で玩具を作るワークシヨップには大勢の親子連れが詰めかけていた。並木沿いには資源ごみのリサイクル例として、使用済みペットボトルから作られたTシャツや、かつては食品トレイだったハンガーが展示されている。沼男は斜めに構えたり姿勢を低くしたりしながら着々とカメラに収めていく。杉の緑は濃く、木洩れ日は金色だった。私も手帳片手に、「エココンシャス」など初めて見聞きする言葉を書きとめていった。だが、ともすると展示品でも売り物でもなく、それらの表面で濃淡を変える光と影の模様を、目で追っていたりした。沼男はふいにこちらにカメラのレンズを向けることがあった。私はそのたびひよいと目を瞑った。遠くから男女の力強い歌声が聞こえていた。「温室効果ガス」「議定書」「打ち水には残り湯を」、すごく具体的な歌詞だ。

「芝生に特設ステージがあるみたいだね」私は歌詞を聞き書きしながら言った。「子ども広場のじゃなくて、だだっ広い方。春になるとサーカス団が来てテント張る芝生」

言ってから知ったが、沼男がいない。首をめぐらせながら私は足早に歩いた。沼男がどんな格好をしていたか、裸ではなかったという程度しかわからない。携帯電話の番号も知らない。帽子を被っていた気がする

が何色だっただろう？ 何か被っているくらい嵩高い髪だからそう思うのか。ほしいのがあれば言いなと気障きざに勧めてくれたのは湯たんぼだったか。たしかに二人でいたのに、なんだか何も思い出せなかった。

この大公園には電車を乗り継いでやってきた。沼男はいつもどおり機嫌がよかった。会場に着くと予想外の人出に機嫌よくのけぞっていた。はぐれたらこの東ゲートで落ち合おうと私が提案すると、俺は潔く迷子になる、と決意を表明した。

特設ステージから聞こえていた歌声がいつしか、リメイクをテーマとしたファッションショーの司会進行に取って代わられていた。キャベツかほちやに南瓜かぼちや、「有機野菜」の幟のぼりをたてた販売ブースが並ぶ通路は青空市場のような活況を呈している。私は行き交う人たちの間をすり抜けて公園中央の園芸ゾーンに出た。大きな盆栽をめぐって静かにもめている老夫婦の間から、沼男の顔が突きでていた。彼らと共に購入を検討しているような面持ちで店員の売り口上を聞いている。

「沼男」

彼は片手を挙げて「ごきげんよう」とこちらに出てきた。

「落ち合い場所に戻ってきたら、東ゲートが盆栽屋になってた」

はかない方向感覚の持ち主はそう言って頭からフードを払った。グレーのスウェットパーカーも煉瓦色れんがのカーゴパンツも、制服の印象と違って体に沿うつくりだ。

「沼男って私服そんな感じなんだね」

「一応、会ってから二時間以上経ってるけどな。腹減らない？ 何か食おうよ」

テーブル席が併設されたオーガニックフードのエリアは混みあつていて、私は何度も沼男の所在を確かめながら歩いた。すると、さっきまでは頭を掠かすめもしなかったことだが、彼が今日こそ私と史乃との関係について尋ねてくるのではないかという気がした。

チカになら先週、あずまやでとうとう訊かれた。

「なんか史乃とこじれてるみたいだね」

私は青黒い川波をぎゅっと凝視してからチカを見た。彼女の涼しげな唇は両端が引き上げられていたが、内に笑みは含んでいない。わかった？ と応じる私の肩へ、急にどきっともたれかかって彼女は言った。「史乃を怖れる理由があるの？」

「えっと」と口ごもったきり私は黙って理由を探した。でもそれは見つからず、控えめに言った。

「史乃を怖れて言いなりになってるわけじゃない、ような」

チカは私の肩に頭を持たせたままうなずいた。私が同じ動作をしやすいよう、呼び水になってくれているのだろう。彼女が私の何倍も何倍も優しいから、チカを遠く感じた。

沼男は何も言わなかった。私にも史乃にも普段どおり接している。シロも北岡君も、他の人もそうだ。私はとうに自分の意図を超えて出来の悪い生徒になっていた。自業自得なのだから同級生から軽んじられそうなものだが、誰も史乃に加担する兆しを見せず、しぶといマイルドさで私を対等に扱う。自分が「悪」の側になるのを徹底的に回避するように。私たちは有機栽培の原料から作られているというパンを買った。手際よく包装してくれたのは二十代半ばくらいの肌の浅黒い女だった。体の軟らかそうな印象があった。食品を取り扱っている他の店の人たちと違い、編み目の粗いボルドー色のセーターをかなりルーズに着ている。広い襟ぐりからは片方の肩が今にも丸く現れそうだった。しかし商品の丁寧な扱い方やきびきびした説明、肘近くまでたくし上げた袖口から伸びるしつかりした形の手と清潔な爪は、彼女を自然に信頼させた。

「あの、オーガニックならエコだ、ってどうして言えるんですか」

沼男は薄茶色い紙の袋を両手で受け取ってから尋ねた。機嫌を損ねたらパンを渡してもらえないと思ったのだろうか。おつりを勘定していた彼女は顔を上げた。手入れされていない毛足の長い眉がどこか植物めいている。

「農薬を使うと川や海は汚染されるし、生態系を壊すことにもなるよね。無機物を土に混ぜる化学肥料は微生物の栄養にはならないし、結果土が

瘦せてしまう。自然界の食物連鎖の中で植物の栄養素もつくられるべきなんだよね。それに石油由来の化学肥料を使い続けることによってできないでしょ。資源を減らすんじゃなく持続可能なやり方じゃないと」

やっぱ取ったら戻さなきゃですね、と愛想よくまとめる男子高校生から目を逸らして女は私の方を見た。まなじりの静かに上がった目。誰かから見られているというより、しんとした光に照らされている感じに近い。気づいたら私は、今の今まで心になかったことを口にしていた。

「私の命を救ってくれた人は、私を、もうもとに戻せないという目で見ます。まるで盗んだみたい。泥棒みたいに」

困惑してそつと唇をとじた。しかし、そういえばあの時、男児の靴とみずぼらしい葛藤とを握って濡れ鼠ねずみで自転車を追いかけた私に、佐原さんは「死にたいときは死んでくれ」と言ったのだった。もし私が喜びで顔をぴかぴかさせて追いかけていたら、きっと彼も「十四年前のあのとき、素通りしてやればよかった」とは思わなかっただろう。

噴水から細かな水音の群れが克明に聞こえていた。別に優しそうではない、淡々とした笑みを浮かべて女は言った。

「だけど君が、まだ盗まれる途中でいつづけてることは、君のせい」「え？」

私ではなく沼男が言った。まさか彼女が、私の訴えに対して何の追加説明も求めずんなり応じるとは、私同様思っていなかったのだろう。女は柔らかくつまんでいたおつりを、沼男に寄越よこした。顔はこちらに向いていた。

「君は、君たち二人の内の半分を、満たしてない。あるべき分を埋めるのはこっちの子の勢いだけというか。うん、どうも君って、まるで本当にここにいるみたいに、見えるだけだね」

私は言葉をなくして彼女の目を見つめ返した。「イリュージョンなの？」と沼男が私に訊いていた。

ずれた袖口を、彼女がたくしあげたときだった。視界が思いきり引つ張られる感じがした。今まで隠れていた肌に、刺青いれずまが見えた。歪んだ円

形の輪郭、扇状に走る筋と年輪のような線とが交差する、細密な模様。

—— 私たちに必要なのは、〈自分という存在はもつと大きな存在の一部にすぎない〉という認識です。私たち同好会は一つの試みとして、各人が腕に一枚の、小さな鱗うろこの刺青を入れています——

あの夜、路上でぶらぶら踊るように男が配っていたピラを読んでいなければ、それとわからなかったかもしれない。だが今日の前の腕に彫られているのは、鱗に違いなかった。沼男が片腕に抱えている薄茶色い紙袋のロゴに視線を走らせた。〈PDA〉と藍色のスタンプがかすれ気味に押されていた。

新しくやってきた客が、惣菜そうざいパンの値段を一つ一つ訊いた。刺青の女は、私と沼男が尋ねたときと同じくきびきび答えてから、「一応こちらにお値段表示してます」と陳列台の縁をほんとなたいた。

「そこに価格表はありません」

沼男がかなしげに口を挟んだ。どうりでよく訊かれると思った、と言う彼女がパンをいくつか売っている間に、私たちは近くの植込みから足跡だらけになったリストを発見した。結局、沼男の推薦で私が新しく書いた。今日中にパネル作りも進めるつもりだった私たちには、大判の紙やカラーペンの用意があったのだ。

「字を書くのがすきなんだね」

バックヤードで書いていると、接客の合間に彼女が覗き込んだ。

「はい。どうしてかわからないけど」私はそう言ったが、彼女に見られている内になにげなく継ぎ足した。「……文字はみんなに共有されているものだから。シャーペンの芯を紙にくっつけて、ゆっくり正しく書いている間は、何かと手をつないでる感じがする」

自分でも思いがけない返事で、なおかつ情けない気もしたが、訂正しようとは思わなかった。見慣れていなくてもそれは自分の血のようにはつきりと自分のものだった。女は「ふうん」と言った。彼女のたたずまいははそっけないがしなやかな重みがあって、だから向き合っていると、自分の中の遠くかすかな答えが引き寄せられるのかもしれない。

地べたに胡坐あぐらでパンを頬張りながら、パネル用にイベントの感想文を書いていた沼男は、「冷えた。トイレ」と言って人波に紛れていった。価格表が仕上がり、「お礼に」と彼女は二人分の菓子パンを持たせてくれた。

「あのさ、さっきのことだけど。君がもぬけの殻だとかって批判したんじゃないから。君、いいよ。根本的な選択肢からして二つもあるじゃん。赤ん坊と違って、意識のあるままこの世に生れ落ちてみるもよし。今の状態でこそ所属できる世界を、新しく作るもよし。そうそう、うちの会を知ってるんだね。良かったら、」

彼女の声はすうっと遠のいていった。私は雑踏の中を歩き出していた。刺青から紙袋のロゴへ瞬時に移した私の視線を、彼女は正確にとらえていたのだ。噴水の縁に腰掛けてパンを齧った。表面がぱりっとしていてこうばしい。ざわめきを縫ってどこかから届き、どこかへ消えていくラジオ、土と緑の匂い、輝きが入り乱れる噴水の水面。狭い通路をゆつたり練り歩くたくさんの人たちのうねり。それらは一つにまとまって、それら以上のもののような気配を放つ。濃い青空の下を流れるやわらかな混沌。イーダを、光る鱗に覆われた長大な獣を彼女は見たのだろうか？なぜかまた盆栽屋にたどりついていて沼男と合流し、公園を出た。乗客のまばらな電車で、座席にふんぞり返って携帯をちまちま操作していた彼が「あっ」と声を上げた。

「見といて良かった。良かったけどやばい。臨時休館だって」

私たちは図書館で調べものやパネルのレイアウト案のまとめをするつもりだったのだ。文化祭は目前に迫っている。

「もう班の、他の奴らはあらかた準備できたみたいなんだ。俺らのせいで足並みが揃わないのってやだな。でもバイトも急には休めないし」

沼男はめずらしく、張りつめた冷たい声で言った。ちよっと突けばすぐ苛立ちへと転覆しそうな憂いを帯びた彼の顔は、一発芸のときより男前だった。なんだか気の毒だった。

「佐原さんの家に行こうか」私は沼男がいつもの彼に戻るための梯子はしごを

かけたくて、パツと言った。「本棚がかなり図書館っぽい。頼めば卓ちゃく袱台ふだいも使わせてくれると思う」

「誰。美人？」

「ほぼ三十路みそじの男子」

沼男はうつむいたまま息を漏らすように笑った。揺れた肩が私の肩に当たって、そのまま駅まで離れなかった。途中、私は少しだけ眠った。

中学三年の九月に転校してきた美しい少年は、教室の光景をやすやすと裏返した。

それまでも、しつくりこないクラスだったことは確かだ。ふつうなら同じ毛色の生徒同士が集まって複数のグループが生まれ、教室内での役割分担も自然と決まってくると思う。しかしあのクラスでは私も含め皆が奇妙に均質な表情を持っていた。それでいて性格が似通っているわけでもなく、いつまでも関係が定まらなかった。皆が皆と親しく、周りを思いやり、誰のことも傷つけないよう細心の注意が払われ、平等で、なごやかで、違和感があった。誰の意志によるでもないその空気が偽物だと皆わかっていた。しかし取って代わるものもなく、何より決して有害なものではないから、誰もそれを壊せずに支配されていた。

高峯たかみねはそのクラスにすつきりと転校してきた。夏休み明けのけだるさを叩き落すような、革新的に綺麗きれいな生徒だった。どの女子生徒よりも色白で目が大きかったし、どの男子生徒にもない精悍せいかんさがあったが、そういうものだけではなかった。彼の美しさは、美しさの反対にあるもので容いれてるように動きがあり、濃密だった。

高峯は瞬く間に、それまで教室になかった「中心」になった。どちらかといえば小柄で成績全般は人並みだったが、何をしてもさまになる点においては右に出る者がなかった。黒板の消し方など録画しておきたいほどだった。ぎこちなさというものが一切ない。女友達とすぐ長いキスをしても、煙草をふかしていても、彼の仕草には鳥が羽を広げるような当然性しかなかった。それは私たちの間ではとても目立った。

ともすれば彼に群がる取り巻きほどの執着はないにせよ、私もやはり彼を目で追いがちだった。目が合うと一瞬視界が冴えるような気がしたものだ。理科室では席が隣だった。「勝見さんかっみその髪うまれつき？ 染めてんの？」と彼に訊かれると、自分でも判断を迷うほどうわづった。一方で私たちは彼に軽んじられるのをおそれ始めた。決して、「何事においても彼より劣る」という思考パターンに陥っていたわけではない。ちよつとした空き時間でも遊ばずにはいられず、飽きつぱく、そのくせ勝たなければ気がすまない、彼の幼稚さも知っていた。けれど誰もそれを笑わなかった。彼が無造作にあらわす、「自然」に近い趣が、私たちを黙らせていた。彼一人でクラス全員を疎外しえた。

十月に入った最初の放課後、その日は特に多くの同級生が高峯の机の周りに集まっていた。たしか彼が年上の知り合いから譲り受けたという古めかしいカメラを持ってきていて、使い方がよくわからないから慣れた人がいたら教えてほしい、と呼びかけたのだ。放課後ではあったが合唱コンクールの練習のため全員が教室に残っていた。クラスの半数の間が押し寄せたけれど、誰も彼にとつて有益な存在とはなれなかった。高峯は舌打ちして柔らかそうな黒い髪をかき上げた。そして突然「一、二、三……」と、自分の周りに群がっている生徒とそれ以外の生徒とを、声に出して指差し始めた。前者は高峯自身を含めて十六人、後者は十五人だった。

「練習なんかやめてゲームしよう。いいか、これははじめじゃない。いじめにどこまで似せられるかっていう、パロディーの、遊び。今日からそっち側の十五人が、一人ずつ順番にターゲットになる」

まだ薄く唇をひらいたまま高峯が教壇脇のカレンダーを見遣る。三十人が続いてぞろりと首をめぐらせた。高峯はしばしば衝動的に遊びを促す。しかしたいはいは男の子たちをサッカーに誘うかけ声にすぎなかった。私たちはことの次第を飲み込めないまま彼の言葉を待った。席を立った彼は十月から三月までのカレンダーをめくった。

「一のつく日が始日、ゼロのつく日ごとにリセットして次の『当番』

に回す。本物よりもシステマティックで、明確なルールがあつて、その分飽きずに楽しめると思うよ」

彼は空白のカレンダーを朗読するようにそう告げて、振り返った。

「このゲームに反対する奴、いる？ いたら交代制やめて一貫してそいつを標的に確定！ さあ、いる？ いない？」

校舎が面する道から、古紙回収車のアナウンスが聞こえていた。三十人をまじまじと見渡してから高峯は笑った。

「よし、今から一切文句言ふなよ？ お前ら全員賛成したんだからな。これがお前らの本当にしたいことだったんだからな」

彼のそばにいない十五人に私は含まれていた。高峯を囲むにぎやかな輪の中にしばしば姿を見かける史乃も、その放課後は自分の席にいた。誰も何も言えなかった。もし自分が反対の声を上げた場合、誰かが加勢してくれるだろうか？ それを勿怪^{もくげ}の幸いとして自分だけが標的にされるんじゃないか？ この人たちを信じていいのか？

高峯が適当に指名した最初の「当番」がまず命じられたのは、自身を除く残り十四人の、ターゲットになる順番を決めることだった。リセツトされた順にいじめる側に加わってよい、つまり後回しにされればされるほど負荷が重くなるというルールを高峯は設けた。当番は、自分がひそかに思い定めている十四人のランク付けを露わにしなければならぬ。その女子生徒は笑ってごまかそうとした。高峯は着席していた彼女を椅子から蹴り落とした。土気色の彼女の指名によって私は最後から二番目となった。最後の標的は史乃だ。

私たちが今まで漠然と隠してきたもの、取り繕ってきたものはそうやって、高峯の手でむき出しにされ始めた。ふっくらした体格を連日下品に罵られた女の子は、食事を抜き続けた拳句授業中に卒倒した。家の経済状況が逼迫^{ひっぴく}している少年は毎日一万円持つてくるよう言いつけられ、持って来られなくなると殴られた。極端なほど泳ぐのが苦手な少女は、水面が落ち葉だらけのプールに連れて行かれて突き落とされた。弱点は執拗にねらわれ、一方で嫉妬の対象となる部分とはことごとく撥^はねられた。

手先の器用な男子生徒は、コンクールで受賞した木工作品を目の前でばらばらにされた。かつて皆から憧れのまなざしを集めていた、有名ブランドのバッグをとられた生徒もいる。校舎のどこかに隠したと告げられて彼女は十日間必死で探したが、本当は初日に焼き捨てられていた。

体育教師が愛用するタイプの、ひも付きの小さな笛が、標的の目印だ。順番が回ってくるとそのプラスチックの黄色い笛を首から提げなければならぬ。高峯が率先して標的を苛んだのは、ゲームが軌道に乗るまでのごく短い間だけだった。結局飽きたのだ。その代り最初は尻込みしていた「いじめる側」の生徒たちがのめりこみはじめた。いかに本物のいじめめいたことを達成できたか、気のないようすの高峯に彼らは報告する。その都度彼らの容貌はふしぎと鮮明になる。

黄色い笛が私に回ってきたのは二月二十一日だった。私は真っ先に髪を切られた。カラー禁止の校則下、色素の浅い私の髪はよく羨ましがられたし、私自身気に入っていた。結わえなくてもまとまりがよく、いつも背中の中の真ん中辺りまですとんと垂らしていた。

鋏はさみを持っているうちの一人は、以前プールに落とされた生徒だった。切ってくださいと言わなければ家に火を放つ、と含み笑いで彼女に耳打ちされ、切ってくださいと呟つぶやいた。私は椅子に腰掛けていた。耳もとでじよきじよきと音がした。スカートスカートの膝に置いた手の甲へ、髪の毛がさかんに落ちてくる。掌には後から後から冷たい汗が滲んだ。

これまでに標的となった子たちが一度も教師に相談したり学校を休んだりしなかったのは、高峯の仕返しに怖かったせいだけではない、と思つた。きっと十月一日のあの放課後に彼を拒めなかったことの、当然の報いを受けているという自覚のせいだ。鋏の刃がひやりと首に当たった。それからうなじが急に涼しくなった。元の長さをとどころ切り残した、正気の沙汰ではない髪型になっていた。整えるのを禁じられたためその頭で日常をやりすぎさねばならなかった。

教師は我関せずの態度をつらぬくだろう。しかし、たとえ美容師が流汗を先取りしたのだと誤魔化しても、両親の目はかわせなさに違いな

った。そもそもそんな気の利いた美容師はこの街にいない。

夕食の席で私は両親に、まるでいじめられたかのように見えるだろうがこれはパロディーなのだ、と先制した。本当は救い上げて欲しかった。もう代償は払ったのだから。けれど両親は、確かに事実を見抜きながらも、変わったゲームだね、いい加減にしておきなさい、と穏やかに苦笑して夕食を続けた。私は肝をつぶし、私の心は次第に佐原さんにしがつくようになった。両親とは全く別の切り口で私を生んだ人。その切り口から見る自分は妙に新しく、まだ今から始めることができそうな気がした。この命がかけがえないものとして含まれているその視界を、基準にしたかった。私は佐原さんが見るようにこの世を見ようとした。それはすきとおった佐原さんを見るところに見つけることだった。お年寄りに座席を代わる。きせる乗車はしない。まだ燃えているポイ捨ての煙草のそばを一旦素通りしたときは、何十メートルも引き返して踏み消した。それまで何の気なく使っていた佐原さんからの誕生日プレゼントは価値が跳ね上がった。

三月一日になっても私は笛を首からはずさなかった。

「二月には三十日がないからって、三月十日まで自分の受け持ちだと思ってるのかな。頭の中身までおかしくなったんじゃない、こいつ」

誰かがそう言い、ガムを吐き出して丸めた銀紙を私の頬に命中させた。「そんなに史乃をかばいたいのか？」と別の誰かが言い、「二人ってつきあってんの？ 恋人？」と波のように笑い声が打ち寄せた。

「ちがう」着席したまま私は彼らではなく高峯の方を見て言った。高峯も自分の席にいてイヤホンで音楽を聴いていたから、私は無理やり声を大きくした。「みすみす次の人に回すことは善いことじゃないから」

高峯はすんなりイヤホンを外した。

「あのときゲームをとめなかったのは、善いことだったわけ？」

「悪いことだった。今なら怖くても結果なんか考えず歯向かうと思う。何が何でも善の一本道から離れまいってやり方、はじめたばかりなのだからちよっとでも矛盾することをしたらばらけてしまう」

張り上げる必要がなくなった私の声の輪郭はがたと乱れていた。近くの席の史乃を覗き込んだ高峯は、「得したじゃん」と言った。史乃の顔は臭い匂いをかいたような形に動いた。高峯はすっかり鼻白んだ様子でイヤホンをはめ、音量を上げた。

高校受験をあまりにも目前に控えていたため、三月に入ってから目立った攻撃がなかった。私の携帯の番号が駅前の殺伐とした雑居ビルや街外れの倉庫群にスプレーで落書きされていたことはあったが、攻撃自体がどこかよそよそしかった。受験には髪形を整えて臨んだ。それが高峯の気に障ったようだった。「三年生を送る会」開催日、一、二年生は恒例のキャンドルサービスを行った。どさくさに紛れて高峯は蠟燭ろうそくをくすねていたらしい。下校時に私は中庭を歩いていて、ゆくてに高峯の姿があった。掲示板にもたれる彼を何人かが振り返っている。その灰色のブレザーを背景に浮かぶ小さな火を見て、私も怪訝けげんに思ったが、もう遅かった。彼は一気に人を掻き分けて引き寄せた私の手の甲へ、溶けた蠟を垂らした。私は喉の奥で声が一瞬絡まるような音を聞いた。これをパロディーだなどと思うはずのない、別のクラスの人や下級生たちの悲鳴で中庭は騒然さわぜんとなった。皮膚の上に広がった蠟はまた白く凝固した。高峯はすぐに踵かかとを返した。仕舞い方が浅かったのか、彼のポケットからライターが落ちた。彼は気づかなかった。

「あの、ライター落としてるけど」私は拾い上げ、渡そうとした。

高峯は、本当に嫌そうな顔をした。

「あのクラスは、べてんばっかりだから、あそこでしかできない遊びをしてみようと思ったんだよね。でも勝見さんは俺が見たかったグロテスクさよりもなんか気持ち悪い」

彼は親の都合で他県の高校に入学した。黄色い笛は捨てるより先にどこかに失くした。ゲームに勝ったという高揚感はなかったが、ルールをうやむやに溶かした「善」の手触りは感じていた。まさか史乃にとってのははつきりと「悪」になっていたなんて、思いもしなかった。

当たり前だが玄関先の二人組みを佐原さんはいまいましたに見据えた。訪問の理由を私が告げる間、彼は今にも頭突きしそうな構えを何度か見せたが、「家に上げて」と直截的に頼むと入れてくれた。「失せろ」と沼男に言っているのも、「この人も」と頼むとやはり入れてくれた。本当に私のわがままは、きくと言ったらきくらしい。

「仕事申だから話しかけんな」

佐原さんが念を押して文机に戻り、デスクライトをぱちんと点ける。私と沼男は忍び足で、文机の傍らにそびえる本棚の前に立った。背中を丸めて活字を追う佐原さんのからだは無音だ。彼が主張のない達筆で書き込んでいるのは厚い紙束で、一枚一枚は本の見開きみたいな体裁だった。「p.56では『見る』です。統一しますか?」とか「前頁にも原綴りが挙げられています。トル?」とか、たった一人でやたら色々訊いている。そうかと思えば問答無用で直している漢字もある。時々、サククをつけた指ですばやくページを繰る乾いた音がした。階下からは相変わらずテレビの大音量が聞こえてくる。

本棚を一通り眺めた沼男が、「すげえ。マンガが一冊もない」と鼻づまりみたいな小声で言った。使い込まれた重たげな社会学の人名事典が、腕組みでもしているように二人を見据えた。佐原さんが受注しているのは、むずかしそうな本専門の出版社なのだ。下の棚には入門書の類いが何食わぬ顔でおびただしく揃っていた。経済学や美学にまじって環境学もある。参考にできそうな箇所を抜粋させてもらうことにした。

私は卓袱台を借りてパネルに貼る紙を広げ、どこに何を書くかの割り当てを始めた。天板の上はすぐ資料だらけになった。エコイベント会場でもらった、絶滅が危惧される野生動物の写真つきのビラ、我々がいかに限りある資源を無駄遣いしているか訴えるパンフレット、取材メモ。沼男がインターネットから印刷してきたエコ生活のガイドには、環境破壊や温暖化の推移を示すグラフも掲載されている。デザインのなことは苦手だと言って沼男はレイアウトを私に任せ、本棚から拝借した本を割合熱心に読んでいた。時々がさつな字でノートに書き写している。

仕事が一区切りついたらしく佐原さんがデスクライトを消すと、部屋はすっかり夕闇に沈んだ。ストレッツチめいたものを軽くこなし、せんべい座布団片手にこちらへやってきた彼に、沼男は「この本から引用しまくりっす」と笑いかけた。真上の電灯を点けてから佐原さんが腰を下ろす。そして明るくなった卓袱台の上を見た瞬間、「つ」というような声を立てて彼は天板の上の全てをなぎ倒し、払い落とした。私と沼男は蜘蛛の子を散らしたようになった。当人はため息をついていた。厚い前髪の下で目の色が、冷たそうな濁りを帯びている。私の手前くっつかかるわけにもいかず、沼男はやむなく呆気にとられつづけていた。私はどきどきしながら畳に撒かれた資料やカメラやカラーペンを拾い集めた。

「物騒なもんちらつかせやがって」佐原さんは言った。

物騒。私が沼男と心の声を一致させただろうそのとき、スーパーの袋が擦れあう音とともに玄関のドアが細く開いた。隙間から見えた灰色の風景を塞ぐように、俊子さんが大荷物と自分の体を滑りこませる。「佐原さんのお姉さん」と私は沼男にささやいた。彼女は少し目を細めた。「亜季ちゃん？ あれ、ここで会うのははじめてだよね」

彼女がパートでレジ打ちをしているドラッグストアに私はよく行く。目薬やのど飴やハンドクリームといった気軽なものを買うだけだが、店員のどぎつい蛍光色のエプロンとかタイムセールのすさまじい掛け声は、そもそも病人向きではない。レジがすいていると私たちは世間話をする。彼女は表情こそあまり動かささないが、早口でたくさん喋る。

「彼氏？」

ちょうど空き地になったばかりの卓袱台に重そうなスーパーの袋を置きながら、ハスキーな俊子さんは沼男を顎でしゃくった。

「文化祭の作業班が同じなんです」私は言った。

「六班の沼木康男です」

何のたしにもならない肩書きまで言い添えて沼男はしっかりとお辞儀をした。佐原さんの暴挙で目がうつろになっていた彼だが調子を取り戻したようだ。俊子さんはスーパーの袋から取り出した肉や魚を、がらん

とした冷蔵庫や冷凍庫にしまっていく。

「お二人で暮らしてらっしゃるんですか」沼男が声をかけた。

「違う違う。全部この人の食糧。ほっとくと安い菜っ葉ばかり食べるからさ。たまに私が、既成事実みたいな感じで買いためしとかないと。」

この人、収入は人並みにあるんだけど金遣いが荒いから、家計は私が管理してるのね」

「ギャンブルですか」沼男は眉を上げた。

「募金箱。あれ見ると自制心がきかなくなるらしくって」

俊子さんは流し台にもたれて換気扇の下で煙草を吸い始めた。ぞんざいだが薄くはない化粧と年季の入った茶髪。それを別にすると、この姉弟の、小さくまとまった目鼻立ちはそっくりだ。

「佐原さんはすごく善い人なの」私は沼男のために補った。

「善い人？」

俊子さんは唇の隙間からすばやい煙を吐いて言った。それから彼女は食器棚のちよつとしたスペースに置かれた菓子折を見て、私の聞き違いでなければ、舌打ちをした。佐原さんは立ち上がってその箱をこちらへ持ってきた。彼の平たい指が包装紙を注意深くはがしていく。

「亜季ちゃんも知ってるでしょ、小学校でも中学でも暴れまわってこの人一人で学級崩壊に追い込んだこと。とにかく小さいときからヒステリックで自己中で。欲しい物が手に入らないと絶叫する、親を殴る。女を好きになったら脅迫してつきあおうとする。実際訴えられたことあるし」

「づけけ言うお姉さんだったが、佐原さんは何も聞こえていないように私と沼男にもなかを配ってくれた。私はもなかで買収されたようなイメージで言った。」

「でも今は、正義の味方じゃないですか。間違いは正すし。困っている人を放っておけないし」

「何言ってるの。正義なんていう内面はこの人にはないよ。生理的な不快しか基準のないやつなんだから。家から学校に、学校から自分の周

りの環境全てに、わがままの規模が拡大してるだけだよ？ そりゃ物欲なんかは若いうちに使い果たしてもう枯渇したでしょうよ。けど仙人みたいに暮らしてると思ったら大間違い。自分の外側のできごとまで我がこととして感じとるから、ちよつとしたポイ捨てにも本気でむかついてるし。蒸し暑いとか、服が窮屈だとか、そういうのと全く同列の主観レベルでね。子ども嫌いなのにどしどし迷子を見つけ届けるのは、この人にとっては迷子があればからよ、何だっけ、予期する状態が欠けること何て言うっけ」

「瑕疵^{かし}」

徹底的に聞き流しているようだった佐原さんが即答した。

「そう。まわりの瑕疵まで自分で埋めようとする。この人には内も外もないわけ。早朝から商店街のゴミ拾いしてるのだってボランティアとしてじゃない、自我が肥大しすぎて世界と癒着した男の哀れな末路ね」

俊子さんはエスカレートした。かなり鬱憤がたまっているらしい。佐原さんは慣れた手つきで包装紙を何度か切り分けてとんとんと端をそろえ、メモ帳にした。沼男が「エココンシャス」と言い、「黙れ」と佐原さんが乾いた声を出した。俊子さんの声はさらに乾ききっていた。

「環境破壊がそのまま自分の破壊につながっちゃう特殊な頭の回路だからね」

「だからこの部屋にはテレビがないんですかね？ 情報を遮断しないと体がもたないから？」

沼男が遠慮がちに言った。部屋の主は無視しているが、きっとそうなのだ。パソコンも、仕事で最低限使うだけなのだろう。どこかの部屋から、女どうしの諍^{いさか}いの声が甲高く聞こえていた。何歳ぐらいなのか見当がつかない。一人が二役を演じているようにも聞こえて背筋がひやりとした。俊子さんが言った。

「私なんかは、娘や夫や両親が元気で学校に行けたり仕事ができたりすればそれで幸福だと単純に思っちゃうけどね。この人は永遠にくつるげないのよ。不完全な世界に完全を求めるんだもの」

熱心な校正ぶりと世界規模のわがままとが、少しだけ重なってみえた。「抜本的な解決を求めるなら偉いもんだけど、その場その場の不快感に左右されるだけ。たとえば、ただそこに募金箱があることで、それが必要な世界だっていうことで、息苦しくなって有り金はたいちゃうのね」「これ二人で分けな」

彼女がまだ話している途中から佐原さんはそう言い、中身を取り出した菓子箱の解体にかかった。俊子さんの分が気になって、彼女はもなかが嫌いなかと問うと、佐原さんは一拍置いて応じた。

「ちがうけどあの人は、これは食べない」

俊子さんはふと思いついたように言った。

「むかし亜季ちゃんを助けたのだったって、可哀相だからじゃない。事故が起こるのは瑕疵だから」

私ははっとして俊子さんの目を一直線に見た。彼女もはっとしたように、もたれていた流し台から腰を離してこちらの目を見つめ返した。

「ごめん」

私に無理には受け取らせないような、自分のすぐそばに軽く置くだけのような声でそう告げてから、「ユニバーサルな弟よね」と俊子さんはいつものタフな視線に戻って言った。

商店街の柱ごとの造花が、夜風でゆさゆさと揺れていた。魚屋の濡れた床が裸電球に照らされて光っている。来たときよりも人通りはあった。私は自分の両肘を抱く格好で、沼男の少し後ろを大股で歩いた。彼が振り返る。命を救ってくれた人とはあの人のなか、と訊かれるのかと思っただ。しかし彼は「どした、寒い？ 上着貸そうか？」などと甘いことばを寄越した。根本的なことを尋ねて私との距離を縮めない分、表面的な気遣いを大安売りする。そのやり方は両親と似ている。ただ違うのは、まれに彼の目に宿る、意地みたいなものだった。問わなくても知ることのできる事柄からだけは、目を離すまいとしているような。

アーケードが途切れる道で別れるとき、沼男は「大丈夫だよな？」と

言った。俊子さんとの最後のやりとりを指しているらしかった。

「大丈夫。ありがとう。むしろあんな風に教えられて良かったと思ってたんだ。さっきから、じわじわと」

いつも私の枠組みだった、自分と不釣り合いなほどの善がふいに外れて、今は肌寒いような自由のなかにいるのがふしぎだった。

「嬉しいというよりは不安だけど、暗いというよりはまぶしい気持ち」

「よし」と言って沼男はフードをかぶった。

「ごめんね、すごい家に連れて行っちゃって」

「異常な人だったけどきらいな人じゃなかった」

「よかった」

「でもあの目にはなぜか、『頭^ずが高い』って言われてるような気がするぜ」

「言われてるんだよ」私は笑った。

沼男と別れて一人になってから最初の赤信号で立ちどまり、月を見上げた。まわりには駅から流れてくるスーツ姿の人たちが一人また一人と溜まってきた。それぞれがひどく個性的な疲れを滲ませていて、暗がりで見ると陰影だらけの他人の顔は、どことなく迷路みたいだ。でも少し上空から見たらあつという間に私たちの見分けはつかなくなる。

信号が青に変わった。待機していた群れが、いっせいに同じ方向へ流れ出す。感情とは関係のない結びつき。街角にひっそりと現れる高密度。

この人たちの誰も、生まれてから物心つくまでの空白の時間を克明に覚えてはいないだろう。二歳になる直前、亜季と名づけられてはいてもあの命はまだ「私」ではなかった。世界から分かれていなかった。そして何もかもとひとしいという破格のクオリティのまま息絶えるところだった。今この世界で、あの頃の世界の余韻を聞くために耳を澄ますのはむなしなことだ。でもおそらく、位置をずらすだけで見え方はがらりと変わってしまう。私の心を持ったまま私以外とひとしくなり、あの世界がこの世界になる。

自分が思っているのか、私の心の中で刺青の女が喋っているのか、す

るりとわからなくなつた。横断歩道を渡つた先にあるコンビニでペットボトルの緑茶を買つた。レジを待つ間、ずっと手帳に挟んだままだったビラをひらいてみた。「ヘイダ会」によるこそ！」という活字はもちろん変わっていない。けれど、こんなにはびっしり鱗の透かし模様が入っているなんて、夜道でこれを拾ったときは気づかなかつた。あれから今までの間に少しずつ浮き上がってきていたみたいだ。待ち伏せされていたみたいだ。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文學界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」（群像「09年5月号」）、「予言残像」（群像「10年6月号」）、「今どこ？」（WB「20号」）、「合図」（早稲田文学記録増刊「震災とフィクションの『距離』」）など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2012

published by wasedabungaku 2012